様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３５０８

研究課題名（和文）幼児期・児童期の情動発達アセスメント・スケールの開発と保育・教育への応用

研究課題名（英文）Development of the emotion development assessment scale for young children and schoolchildren, and its application to childcare and education

研究代表者
本郷　一夫（HONGO, KAZUO）

東北大学・教育学研究科・教授

研究者番号：３０１７３６５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,000,000円

研究成果の概要（和文）：情動発達について以下の5点を明らかにした。
(1) 幼児1667名を対象とした調査に基づき、幼児期の情動発達スケールを開発した。(2) 幼児1068名を対象とした調査に基づき、「気になる」子どもは情動の理解、共感において遅れがあることを明らかにした。(3) ５歳児を対象とした情動表現の実践から、子どもは自分の情動が生起した背景を言語的に表現することが多くなることを明らかにした。(4) 小学生2142名を対象とした調査から、「気になる」子どもは抑制、理解、共感において遅れがあることを明らかにした。(5) 小学生84名を対象とした実験から、情動理解と他者視点取得とは関連することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
幼児期、児童期の情動発達について、典型発達児と「気になる」子どもを対象として研究を行った。その結果、(1) 「気になる」子どもは、情動の「抑制」よりもむしろ「理解」「共感」に遅れがあることが明らかになった。(2) 情動の「理解」は、他者視点取得の能力と関係することが明らかになった。(3) 情動を表現する活動を通して、情動表現そのものだけではなく、情動が生起した背景を言語的に表現することが多くなることが明らかになった。以上の点から、情動調整の難しい子どもには、情動抑制の訓練よりも、情動を表現させることを通した情動の理解と共感を育てることの重要性を示した点で社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：We clarified the following five points about emotional development.
(1) We developed the emotional development scale for young children. (2) We clarified that the young children requiring special care had a delay in “understanding of emotions” and “empathy”. (3) We clarified that the effect of the activity which expressed own emotions in a nursery school. As a result, one year after, the 5 years-old children expressed more often the background of their emotions linguistically. (4) We clarified that the score of the elementary school children requiring special care was lower in "control of emotion", “understanding of emotion”, and “empathy”. (5) We clarified that emotional understanding related to others viewpoint acquisition.

研究分野：発達心理学

キーワード：情動発達　「気になる」子ども　典型発達児　情動理解　情動表現　情動調整

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、保育・教育場面においては、顕著な知的な遅れは認められないにもかかわらず、「自分の行動や感情をうまくコントロールできない」「対人的トラブルが多い」「集団活動に参加できない」といった特徴をもつ子ども、いわゆる「気になる」子どもへの対応が問題となってきている。このような「気になる」子どもの中に、後に、ASD、ADHD、LD などとして診断される子どももいる。しかし、一方で、青年期になっても発達障害としては判定されず、適切な支援を受けないまま高校に進学し、不適応状態に陥るケースもある。したがって、障害の診断の有無にかかわらず、このような子どもの特徴を早期に理解し、継続的な支援していくためには、まず第１に、適切な発達アセスメントとそれに基づく支援が必要であると考えられる。

従来、「気になる」子どもや発達障害をもつ子どもの理解をするためには、個別式の直接検査である「知能検査」（WISC-Ⅳ、KABC-Ⅱ）や「発達検査」（新版K式発達検査 2001 など）が多く用いられてきた。そして、主に認知の遅れや認知のアンバランスさの観点から、子どもの理解がなされてきた（本郷，2008）。しかし、「気になる」子どもや発達障害をもつ子どもの中には、知的な遅れを示さない子どももいる。また、自閉スペクトラム症の子どもの中にも必ずしも知的な側面でのアンバランスさを示さない子どももいる（本郷，2010）。したがって、発達アセスメントに当たっては、検査場面における認知的側面のアセスメントだけではなく、日常生活場面における情動発達のアセスメントが重要となると考えられる。

２．研究の目的

本研究は、幼児期・児童期における情動発達アセスメント・スケールの開発とその教育への応用を目指すものである。近年、保育・教育場面において、発達障害がある子どもや「気になる」子どもの理解と対応が一層求められるようになってきている。これらの子どもたちの特徴の一つとして、知的側面での遅れはないが、対人的トラブルが多く、集団に適応しにくいといった点があげられる。したがって、知能検査によって認知の遅れやアンバランスを詳細に調べても、子どもに対する具体的な支援にはつながらない場合も多い。むしろ、子どもたちの情動発達の特徴を捉え、それに基づく支援を実施することが重要となる。そのような点から、本研究では、情動発達アセスメント・スケールの開発とその教育への応用を目的とする。

３．研究の方法

４年間の研究期間を通じて、次の５点の方法で研究を進めた。

(a) 保育場面における情動発達項目の収集を行い、情動発達に関する項目を年齢別に配置するとともに、各領域間の発達連関が分かるように項目を整理し、アセスメント・スケールを作成した。
(b) 幼児を対象とした調査結果に基づき、典型発達児と「気になる」子どもの情動発達の特徴について検討した。
(c) 幼児を対象として保育実践を行い、保育場面において情動を表現させる活動の効果の検証と「気になる」子ども、発達障害がある子どもへの支援方法について検討した。
(d) 児童を対象とした調査結果に基づき、典型発達児と「気になる」子どもの情動発達の特徴について検討した。また、児童を対象として、ASD 傾向、ADHD 傾向と情動発達との関連を検討した。
(e) 児童を対象とした実験に基づき、情動理解、他者視点取得、情動理解に関する自己認識の関連について検討した。

４．研究成果

(1) １歳～６歳の幼児 1667 名を対象として、情動発達の項目を収集し、その項目を年齢別に配列した。また、典型発達児と「気になる」子どもの違いが大きい項目を抽出し、幼児期の情動発達スケールを開発した。また、情動発達と認知・言語発達、対人関係の発達との関連を検討した。その結果、認知発達、言語発達に比べて情動発達が仲間関係と関連していることが明らかになった。

(2) 幼児期の情動特徴と行動特徴との関連を明らかにするために、４～６歳の幼児 1068 名を対象として調査を行った。その結果、「気になる」子どもは、典型発達児と比べて、情動の理解、共感においてとりわけ遅れが大きいことが明らかになった。また、ADHD 傾向が高い子どもは、情動の抑制が難しいことが分かった（Table1）。ASD 傾向の高い子どもは、とりわけ情動の理解と共感が難しいことが分かった。

(3) ５歳児を対象として、保育場面において情動を表現する活動を実施した。その結果、1 年後には、子どもは自分の情動が生起した背景や理由を言語的に表現することが多くなった。これは、単に情動の表現だけでなく、情動の生じる過程や背景についての理解が深まった結果だと考えられる（Figure１）。

(4) 小学校１～６年生の 2142 名の児童（「気になる」子ども 1071 名、「気になる」子どもと同年齢・同性の典型発達児 1071 名）を対象として、情動発達の違いを検討した。その結果、言葉による情動表現、抑制、誇り・恥、理解、共感においては、典型発達児の得点がより高かった。一方、表情による表現、過敏さについては、「気になる」子どもの得点がより高かった（Figure2）。

Table1 ADHD 傾向と情動発達との関連

領域	ADHD傾向低群	ADHD傾向高群	t値
表現(表情)	4.08	4.54	7.13***
表現(言葉)	3.84	4.29	5.81***
抑制	2.68	1.96	10.22***
誇り・恥	3.75	3.82	0.77
理解	3.89	3.59	3.08***
共感	3.29	2.86	4.85***
過敏さ	2.58	3.14	5.84***

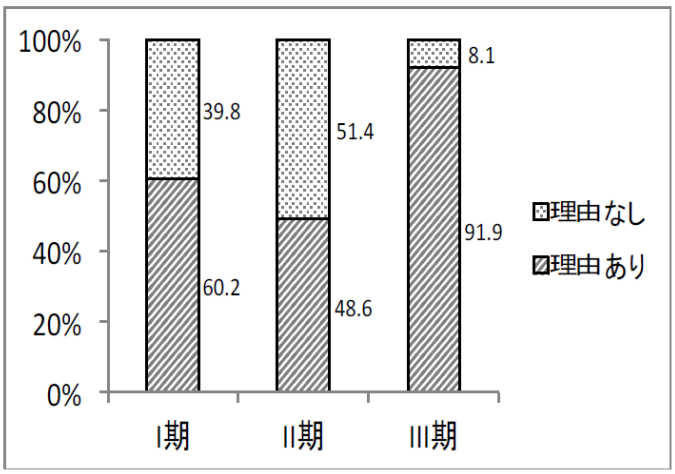

Figure1 情動が生じた理由の割合

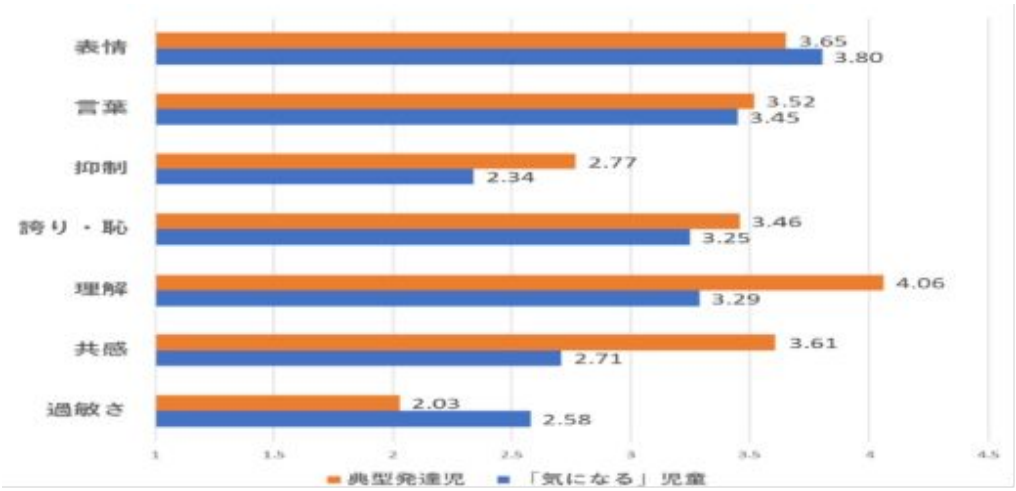

Figure2 「気になる」児童の情動発達の特徴

(5) 小学校１～５年生 84 名を対象に、①情動理解、②他者視点取得、③情動理解に関する自己認知との関連を明らかにするために、実験を行った。その結果、①学年とともに情動理解が発達すること、②情動理解と他者視点取得とは関連すること、③情動理解と情動理解に関する自己認知は低学年では関連がないが、中学年になると関連してくることが明らかになった。したがって、情動理解を発達させるためには、他者視点取得能力を伸ばすことと自己認知能力を高めることが重要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　14　件）

①本郷一夫 2019 「気になる」子どもと発達障害. 日本臨床矯正歯科医会雑誌, 30, 6-10.
（査読無）

②本郷一夫・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文 2019 児童期の情動発達とその特異性に関する研究 ―「気になる」子どもと典型発達児の比較―．東北大学大学院教育学研究科研究年報,67(2). （査読無）
③平川久美子 2019 幼児期における情動表出の理解と日常場面における情動表出との関連．石巻専修大学研究紀要, 30, 113-117.（査読無）
④Hongo,K., Hirakawa,K.,& Iijima,N. 2018 Social Development of Young Children with ASD and ADHD Symptoms. Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University, 4, 1-9.（査読無）
⑤相澤雅文 2018 チック・トゥレット症と学校教育．こころの科学, 194, 30-36.（査読無）
⑥須田 治 2018 情動発達支援：ASD への自然感情チューニング．臨床心理学, 18(2), 189-192.（査読無）
⑦本郷 一夫・大渕 守正・松本 恵美・小玉 純子 2017 幼児期における運動発達と情動発達の関連性に関する研究．東北大学大学院教育学研究科研究年報, 65(2), 31-42.（査読無）
⑧Hongo,K.,Iijima,N.,& Hirakawa,K. 2017 The Social Development of Young Children with Externalizing Behavior Problems. Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University, 3, 1-9.（査読無）
⑨本郷一夫 2016 アセスメント結果の共有を通した発達支援．発達．37, 14-19.（査読無）
⑩本郷一夫 2016 子どもの中で「自分のよさ」はどう生まれ育つのか．児童心理．1031, 1-10.（査読無）
⑪本郷一夫・飯島典子・高橋千枝・小泉嘉子・平川久美子・神谷哲司 2016 保育場面における「気になる」子どもの社会性発達 ―「社会性発達チェックリスト」から捉える「気になる」子どもの特徴―．臨床発達心理実践研究, 11, 85-91.（査読有）
⑫Hongo,K.,Iijima,N.,& Hirakawa,K. 2016 Development of Motor Coordination in Young Children. Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University. 2, 1-6.（査読無）
⑬本郷一夫 2016 幼児期・児童期のくせとちょっと「気になる」行動. 教育と医学. 64, 50-57.（査読無）
⑭本郷一夫・飯島典子・高橋千枝・小泉嘉子・平川久美子・神谷哲司 2015 保育場面における幼児の社会性発達チェックリストの開発．東北大学大学院教育学研究科研究年報．64, 45-58.（査読無）

〔学会発表〕（計 30 件）
①本郷一夫・飯島典子・平川久美子・高橋千枝 2019 幼児期の情動発達と行動特徴との関連に関する研究１ ―情動の年齢別特徴―．日本教育心理学会第 61 回総会.
②飯島典子・平川久美子・高橋千枝・本郷一夫 2019 幼児期の情動発達と行動特徴との関連に関する研究２ ―行動特徴と年齢との関係―．日本教育心理学会第 61 回総会
③平川久美子・高橋千枝・本郷一夫・飯島典子 2019 幼児期の情動発達と行動特徴との関連に関する研究３ ―情動発達と ADHD 傾向との関連―．日本教育心理学会第 61 回総会
④高橋千枝・本郷一夫・飯島典子・平川久美子 2019 幼児期の情動発達と行動特徴との関連に関する研究４ ―情動発達と ASD 傾向との関連―．日本教育心理学会第 61 回総会.
⑤本郷一夫・山本 信・工藤 渓 2019 児童期の情動発達に関する研究１ ―学年による差の検討―．日本発達心理学会第 30 回大会.
⑥山本 信・本郷一夫・工藤 渓 2019 児童期の情動発達に関する研究２ ―情動理解と他者視点取得との関係についての検討―．日本発達心理学会第 30 回大会.
⑦工藤 渓・本郷一夫・山本 信 2019 児童期の情動発達に関する研究３ ―情動理解と情動理解に関する自己認識との関係―.
⑧本郷一夫・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文 2018 児童期の情動発達とその特異性に関する研究 9 ―情動項目の判別分析による「気になる」児童の特徴―．日本教育心理学会第 60 回総会.
⑨平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫 2018 児童期の情動発達とその特異性に関する研究 10 ―「気になる」児童の表情および言葉による情動表現の特徴―．日本教育心理学会第 60 回総会.
⑩飯島典子・高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫・平川久美子 2018 児童期の情動発達とその特異性に関する研究 11 ―「気になる」児童の共感に影響する要因の検討―．日本教育心理学会第 60 回総会.
⑪本郷一夫・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文 2018 児童期の情動発達とその特異性に関する研究６ ―「気になる」児童の情動発達における項目別特徴―．日本発達心理学会第 29 回大会.
⑫高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫・平川久美子・飯島典子 2018 児童期の情動発達とその特異性に関する研究７ ―「気になる」児童の行動特性と情動発達項目との関連―．日本発達心理学会第 29 回大会.
⑬相澤雅文・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・本郷一夫 2018 児童期の情動発達とその特異性に関する研究８ ―「気になる」児童の学校適応の困難さによる比較―．日本発達心理

学会第 29 回大会.

⑭Hongo,K.,Iijima,N., & Hirakawa,K. 2017 Emotional Development of Young Children with ASD and ADHD Symptoms. 18th European Conference on Developmental Psychology.

⑮Hirakawa,K., Hongo,K., & Iijima,N 2017 Participation in Group Activity of Young Children with ASD and ADHD Symptoms. 18th European Conference on Developmental Psychology.

⑯本郷一夫・飯島典子・平川久美子・高橋千枝・相澤雅文 2017 児童期の情動発達とその特異性に関する研究１ ―「気になる」児童の情動発達の特徴―. 日本教育心理学会第 59 回総会.

⑰飯島典子・平川久美子・高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫 2017 児童期の情動発達とその特異性に関する研究２ ―「気になる」行動の特徴―. 日本教育心理学会第 59 回総会.

⑱平川久美子・高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫・飯島典子 2017 児童期の情動発達とその特異性に関する研究３ ―「気になる」児童の行動特性と表情および言葉による情動表現との関連―. 日本教育心理学会第 59 回総会.

⑲高橋千枝・相澤雅文・本郷一夫・飯島典子・平川久美子 2017 児童期の情動発達とその特異性に関する研究４ ―「気になる」児童の行動特性と情動理解および共感との関連―. 日本教育心理学会第 59 回総会.

⑳相澤雅文・飯島典子・平川久美子・高橋千枝・本郷一夫 2017 児童期の情動発達とその特異性に関する研究５ ―情動抑制と誇り・恥の特徴―. 日本教育心理学会第 59 回総会.

㉑本郷一夫・大渕守正・松本恵美・小玉純子 2017 幼児期における運動発達と情動発達の関連性に関する研究１ ―運動コーディネーションに着目して―. 日本発達心理学会第 28 回大会.

㉒須田治 2017 自閉症スペクトラムケースに見出されたこだわりの変化----食物感覚過敏と情動喚起の調整の困難がこだわりを生みだし，パニックを組織する. 日本発達心理学会第 28 回大会.

㉓本郷一夫・飯島典子・高橋千枝・小泉嘉子・平川久美子・神谷哲司 2016 幼児期の社会性発達に関する研究７ ―社会性発達チェックリスト（幼児版）における「気になる」子どもの特徴―. 日本発達心理学会第 27 回大会.

㉔平川久美子・飯島典子・高橋千枝・小泉嘉子・神谷哲司・本郷一夫 2016 幼児期の社会性発達に関する研究８ ―社会性発達の領域間の関連について―. 日本発達心理学会第 27 回大会.

㉕須田治・西田麻野 2016 自閉症スペクトラム障害成人の情動表出の特徴(2)―イプサティブ・データによるアセスメントの試み. 日本発達心理学会第 27 回大会.

㉖須田治・西田麻野 2016 自然主義的接近法による情動への支援（１）---行動の微視的分析による問題への接近. 日本臨床発達心理士会第 12 回全国大会.

㉗ Hongo,K.,Iijima,N.,Takahashi ,C.,Koizumi,Y.,Hirakawa,K.,& Kamiya,T. 2016 Social Development of Young Children with Externalizing Behavior Problems (1) -Characteristic of the Emotional Development-. The 31st International Conference of Psychology.

㉘Hirakawa,K.,Iijima,N.,Takahashi,C.,Koizumi,Y.,Kamiya,T.,& Hongo,K. 2016 Social Development of Young Children with Externalizing Behavior Problems (2) : Characteristic of Participation. The 31st International Conference of Psychology.

㉙本郷一夫・飯島典子・高橋千枝・小泉嘉子・平川久美子・神谷哲司 2015 幼児期の社会性発達に関する研究６ ―「気になる」子どもの年齢別特徴―. 日本教育心理学会第 57 回総会.

㉚Hirakawa,K.,Iijima,N.,Takahashi,C.,Koizumi,Y., Kamiya,T.,& Hongo,K. 2015 Differences in emotional development between typically developing children and children with special care needs. 17th European Conference on Developmental Psychology

〔図書〕（計 8 件）

①本郷一夫監修 須田 治編著 2019 生態としての情動調整. 金子書房. 総ページ数 108、担当ページ数 2-16,40-53,105-108

②本郷一夫・飯島典子編著 2019 保育の心理学. 建帛社. 総ページ数 153、担当ページ数 1-11,78-89,90-101

③本郷一夫編著 2019 発達心理学. 遠見書房. 総ページ数 221、担当ページ数 11-25,80-91,133-146

④本郷一夫監修 藤野博編著 2018 コミュニケーション発達の理論と支援. 金子書房. 総ページ数 116、担当ページ数 83-92

⑤本郷一夫監修 本郷一夫編著 2018 実践研究の理論と方法. 金子書房. 総ページ数 115、担当ページ数 2-11,67-76

⑥本郷一夫編著 2018 「気になる」子どもの社会性発達の理解と支援. 北大路書房. 総ページ数 85、担当ページ数 1-14, 37-56, 72-82

⑦本郷一夫・田爪宏二編著　2018　認知発達とその支援．ミネルヴァ書房．総ページ数 270、担当ページ数 128-146
⑧須田　治　2017　感情への自然主義的アプローチ．金子書房．総ページ数 193、担当ページ数 193

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
①研究分担者氏名：相澤雅文　ローマ字氏名：AIZAWA MASAFUMI
所属研究機関名：京都教育大学　部局名：教育学部　職名：教授
研究者番号（8 桁）：10515092

②研究分担者氏名：高橋千枝　ローマ字氏名：TAKAHASHI CHIE
所属研究機関名：東北学院大学　部局名：文学部　職名：准教授
研究者番号（8 桁）：00412916

③)研究分担者
研究分担者氏名：平川久美子　ローマ字氏名：HIRAKAWA　KUMIKO
所属研究機関名：石巻専修大学　部局名：人間学部　職名：助教
研究者番号（8 桁）：30711246

④)研究分担者
研究分担者氏名：須田　治　ローマ字氏名：SUDA OSAMU
所属研究機関名：首都大学東京　部局名：人文社会学研究科　職名：名誉教授
研究者番号（8 桁）：50132098

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。